

詩集『胡馬の嘶き』の中の一編である。永太郎がこの詩集を出した年は、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』が現われた年であった。日本の詩の流れが大きな変化をしていくときに、旧態依然たる不自由な形式さえらび、形式に夕ガきはめられた修辭の類型性を背負ってしまふ。永太郎の詩は、どうしようもなく時流から外れたものであった。そして、何よりも、近代への信仰に酔いしれている時代にとつて、<sup>近代</sup>近代への疑いを突きつける永太郎の言葉は、まったく耳を傾けるに値しないものであつただろう。その時代には、啄木のこんな言葉がふさわしかつたのだ。

ここに於て精神界に物質界とを問わぬ、若き生命の活火を胸に燃やした無数の風雲児は、相率いて無人の境に走り、我自らの新らしき歴史を我自らの力によつて建設せむとする。殖民的精神と新南地的趣味とは、かくて驚く



べき勢力を人生に植えつけて居る。見よ、ヨ  
 ーロッパが暗黒時代の深き眠りから醒めて以  
 来、幾十方の勇敢なる風雲児が、如何に男ら  
 しき遠征を、アメリカ、アフリカ、濠洲及び  
 我がアジアの大部分に向って試みたか。又  
 見よ。此の方なる蝦夷の島辺、即ちかの北海  
 道が、如何に多数の風雲児を内地から収集し  
 て、今日あるに至ったかを。——北海道の三  
 都——

メーターのまわる音がまたした。

「あ、五千円を越えなよ、ママ」と、四年  
 生になる次女のヨツキの声が背中です。小  
 さな村のパノラマが、海と原野にはさまれて  
 いた。

「あれが本別海ですか？」と、わたしは運転  
 手にたずねた。

「そうです」

短い会話の間にも、村はぐんぐんと近づい  
 てくる。



川岸はコンクリートでかためられ、漁業組合の建物があった。海に向かつて防波堤が突きだし、砂浜のあちこちにはテトラポットがころがっている。

「ワイー！」

リュウがわたしを追い越し、防波堤の上から、砂浜を駆けおそれもなく飛びおりた。ヨツキが飛びおり、セイカが飛びおりる。

「ママ、はだしになっていい？」と、リュウが波打ちわからこちらを振りむいた。

「ああ、いいよ」

恵子の返事をうけて、海の中に子どもたちばかりはくるぶしきつける。おだやかな波が、思いかけないはげしいしぶきを膝かぶに散らばした。歓声をあげて、三人は波打ちわに跳ねもどる。

防波堤の突端で背中を叩いて釣糸を取れている男が、こちらへ首をまわした。男の顔は

ほほえんでいた。しあわせな家族五人が彼の顔の頬をゆるめたのをうらやましく思っている。祖父がこわしつづ

しあわせな家族五人が彼の顔の頬をゆるめたのをうらやましく思っている。祖父がこわしつづ



けたものを、~~ア~~わすれどのできなかつたわたくしである。わたしは、~~人間なのだろうか……~~

つくろいつくす ~~ア~~わすれしもの。わたくしは、~~人間なのだろうか……~~

ア  
ワ

ア  
ワ

ア  
ワ

ア  
ワ

あやふしな赤いふんばしを思い出し、  
うつつかたをみる。あたくしは、  
あやふしな赤いふんばしを思い出し、  
うつつかたをみる。あたくしは、

北海道新冠郡新冠町中央町七の一  
長にもうとむら

向井豊昭 五十歳

一九三三年東京生